

論文番号 46

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Moderate Alcohol Consumption and Hearing Loss: A Protective Effect

適量のアルコール摂取と聴力障害

執筆者

Popelka MM, Cruickshanks KJ, Wiley TL, Klein BE, Nondahl DM

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Journal of American Geriatrics Society, 48: 1273-78, 2000

キーワード

老化、アルコール、疫学、聴力障害

要旨

目的

適量のアルコール摂取が聴力障害と負の相関を示すかどうかを高齢者の大規模集団を用いて検討する。

対象と方法

本研究はコホート研究の集団を用いた断面研究である。1987年から1988年に43歳～84歳のビーバーダムの住民がBeaver Dam Eye Study (BDES)に参加し、1988年から1990年と1993年から1995年に調査が行われた。同時にこの集団を対象として1993年から1995年に聴力障害疫学研究 (Epidemiology of Hearing Loss Study, EHLS) のベースライン調査が行われた。本研究はこの調査成績を分析したものである。聴力閾値はオージオメトリーの純音を用いて気導および骨導の250ヘルツから8,000ヘルツの間の測定を実施した。過去1年間の飲酒歴、以前の多量飲酒、既往歴、職業、騒音暴露、その他の生活習慣は質問紙を用いた面接で把握した。

結果

多重ロジスティック回帰分析で交絡要因を調整した結果、適量の飲酒 (エタノール換算で140g/週、1日あたり日本酒換算で1合弱) は聴力障害 (500ヘルツから4,000ヘルツの聴力閾値の平均値が25デシベル以上と定義) と負の相関を示した (オッズ比; 0.71, 95%信頼区間 0.52, 0.97)。同様の関連が中等度の聴力障害 (500ヘルツから4,000ヘルツの聴力閾値の平均値が40デシベル以上) との間にも認められた (オッズ比; 0.49, 95%信頼区間 0.32, 0.74)。アルコール摂取は低周波数域 (500～2,000ヘルツ) の聴力障害と負の相関を示し (オッズ比; 0.61)、高周波数域 (4,000～8,000ヘルツ) の聴力障害とも負の相関を示した (オッズ比; 0.60)。この関連は年齢別や性別に見ても同様であった。1日4 drink以上の多量飲酒は、高周波数域 (4,000～8,000ヘルツ) の聴力障害と正の関連を示した (オッズ比; 1.35, 95%信頼区間 1.04, 1.75)。循環器疾患の有無や危険因子を検討に加えてもこの傾向は同様であった。

結論

この断面研究のデータから、適量のアルコールの聴力障害に対する防御効果が示唆された。この所見は、聴力障害が老化の過程における避けられない構成要素ではないことを示唆する数少ない証拠に合致するものである。